

# 学生・教員参加型の授業改善活動<sup>1</sup>

Teachers and students participating Improvement Activity for Classroom Teaching

山 崎 泉  
Izumi Yamasaki  
奥 村 実 樹  
Miki Okumura  
二 口 聡  
Satoshi Futakuchi

## 概 要

現時代は、言語コミュニケーションと同じくらいインターネットを使ったコミュニケーションおよび情報共有を実現する力が必須となっている。筆者は一般教養の時点から情報を発信する力を教育する事が必要と考え、情報発信と情報共有を体感することを目的とした授業を実践した。これは、1年次配当の情報基礎理論の受講生に「私のオススメ授業紹介」というテーマに沿って、映像・音声コンテンツを作成させ、学内ホームページに公開・配信し、情報を共有させるまでの一貫した実習である。情報発信能力の実践と併せて、授業改善活動を試みた。授業紹介のコンテンツは、学生自身が好きで興味を持っている授業を他の学生や後輩に紹介するという目的で作成される。学生目線の授業紹介と授業評価は全学的な授業改善につながると考えられる。

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 全体の目的
- 3 大学における授業改善活動の事例
- 4 本例の目的と方法
- 5 学生への影響とアンケート結果
- 6 教員アンケート結果
- 7 考察と今後の課題

### 1. はじめに

現時代は、言語コミュニケーションと同じくらいインターネットを使ったコミュニケーションおよび情報共有を実現する力が必須となっている。筆者は一般教養の時点から情報を発信する力を教育する事が必要と考え、情報発信と情報共有を体感することを目的とした授業を実践した。具体的には、1年次配当の情報基礎理論の受講生に「私のオススメ授業紹介」というテーマに沿って、映像・音声コンテンツを作成させ、学内ホームページに公開・配信し、情報を共有させるまでの一貫した実習を行った。

授業紹介のコンテンツ作成においては「なぜこの授業を後輩に紹介したいと思ったのか。」という課題を通じて、現在自分が受講している授業を振り返り、意識して授業の

内容をまとめさせた。まとめる際には、学生自らが担当教員とコミュニケーションをとり、写真を撮影し、教員の人柄や授業内容についての“オススメポイント”を表現するよう指導した。

上記の情報発信能力の実践と併せて、授業改善活動を試みた。授業紹介のコンテンツは、学生自身が好きで興味を持っている授業を他の学生や後輩に紹介するという目的で作成される。授業紹介の対象となる教員は、自分の授業が好きだという学生から授業や人柄について取材を受ける。このような手法を用いることで、一般に実施される大学主体の評価アンケートよりも教員・学生相互にとって明るいイメージで取り組むことが可能であり、学生目線の授業紹介と授業評価が行われることが期待される。学生目線の授業紹介と授業評価は全学的な授業改善につながると考えら

れる。

## 2. 全体の目的

大学教育とは、学問的知識の習得だけではなく、学生の内面世界をより豊かに発展させることを目的としている。たとえどんなに外部評価の高い手法の授業改善であろうとも、それが学生の内面世界を豊かに発展させるものでなければ、意味がないのではないだろうか。大学教育や大学授業の質的向上は、学生の内面世界を考慮する必要があると思われる。

多くの学生たちは大学の授業を不満だとこぼし、そうでもなく、満足しているとはいわない。授業を改善して教員が良い授業、わかりやすい授業をいくら行なおうとも学生は単純に学業に関心を持つことはない。良い授業を目指すとともに学業への動機づけを重視すべきであることを示唆している。

本学においても、授業には出席するが、学業の意味が見いだせない学生たちが多く存在する。本稿では、「私のオススメ授業紹介」課題を通して学生たちの授業に対する自身のモチベーションアップを試行した。まず、学生たちには、自身の意志で進路を選択し、授業を選択したことを再認識させる。学生たちが、自らの意思決定の結果を振り返り、現状を把握することを通して、今後の授業選択、ゼミ選択および進路選択に役立てるという一連の教育を試みた。したがって本稿の取り組みは、1年次配当科目という初学年で実施することに意義があると考えられる。

本学では、1年次で必修科目として基礎ゼミナールⅠが設定されている。さらに、2年次に進級するときには、学生自身が興味のある分野の教員を選択し、必修科目の基礎ゼミナールⅡを受講する。この2年次配当の基礎ゼミナールⅡクラスを選択するときなど、自ら意思決定を迫られたとき、教員や授業を再認識させることで、大学への関心や今後の授業選択、進路選択に役立てることが可能と考える。また、学生と教員の関係から考えると、今回の試みは公開授業や授業改善活動の新しいスタイルの実践例である。

## 3. 大学における授業改善活動の事例

授業改善活動はいくつかの種類に分類される。ここでは本研究に関係が深いと思われるいくつかの先行的研究の事例とその問題点についてレビューを行う。

### 〈アンケート調査を中心に実施している研究〉

南木・高尾[2006]<sup>2</sup>では、流通科学大学で実施された2003年度後期から3週間にわたって全ての授業を原則として公開し、相互に参観しあう制度を導入した。オープンクラスウィーク制度は、公開するだけ・参観するだけ

ではなく話し合いつき公開授業である。他大学では必ずしも成功していない「横への広がり」が何故実現したかを公開授業制度の特徴とともに述べている。授業公開のための特別な授業を準備させず、普段のままの姿を見せるための制度の工夫と、参観者へアンケートを実施することにより、公開に対する教員側にストレスはかかるが気遣いがともなっていること、一方で公開に耐え得る内容・手法の授業を行うという動機付けになっているとの結果を得ている。

坂本[2005]<sup>3</sup>では、大学において実施されている授業評価の学生へのフィードバックがされていない問題点を挙げ、携帯電話のメール機能を利用したアンケートの集計とフィードバック方式の有効性を検討している。しかし、毎回の授業を学生が即時的にコメントしてくるという行為は必ずしも好ましいとは言えないのではないだろうか。毎週、多いクラスでは100以上のコメントが寄せられることになり、次週ではそれらの中からいくつかのコメントを紹介し、学生にフィードバックするというのは教員に対する負担が大きいと考える。

### 〈教員に対する授業改善を方法論として具体化した研究〉

井奥[2006]<sup>4</sup>では、京都産業大学での事例を取り上げ、大学での授業の秘訣ないしヒントを具体的にまとめたハンドブックを刊行した。このハンドブック『授業改善のヒント』（平成15年4月）は「教員の教育能力を高め、ファカルティー・ディベロップメント（FD）活動を支援し、教育の質のエクセレンス化を図ること」を目的としている。ハンドブックづくりにあたっては在籍教員にアンケートを実施し、広く事例を集め、「実感のこもった内容となっている」「私大教員のため息が聞こえてくるようだ」など好評である。しかし、教員アンケートのみであり、学生の立場で授業改善に取り組んだものではない。例えば、教員の考える良い板書の仕方と学生の考えるそれとに違いがあるかもしれないという可能性がある。

福田 et al. [2006]<sup>5</sup>では、大阪樟蔭女子大学における授業改善の視点と方向性を提起している。「人間形成論」の授業を手がかりにして、学生が授業になにを求めているのかについて「居場所づくり」と「基本的信頼感の回復と再生」をキーワードとして論じている。学生の学習意欲に答える授業内容及びカリキュラムの構築の必要性と1年次教育の重要性を指摘している。授業の目標、内容、方法の相互関連に関する課題や学習指導上の課題を含め「授業を開く」意義として教職員の間で全学的に共通意識を深めることの重要性を論じている。

林 et al. [2005]<sup>6</sup>では、大学教員には学生にとって「わかる」「楽しい」授業への改善が求められているとし、大学生の表現・伝達能力と理論的思考能力の育成を目指し

た実践を報告し、大学における授業設計や評価の在り方について考察している。

＜授業公開の方法論的研究＞

鮫島 et al. [2005]<sup>7</sup>では、公開授業にはまだいくつかの課題が残っているが、教授法改善、授業改善に関して、「学生による授業評価」では不足する観点を与えるものであることと、「教員による授業相互評価」の一つの方法としては特定の少数の教員だけによる評価方法より、公開授業のような不特定多数の同僚教員から評価が得られる方法の方が教授法の改善という観点から効果やメリットが大きい可能性があることを示した。

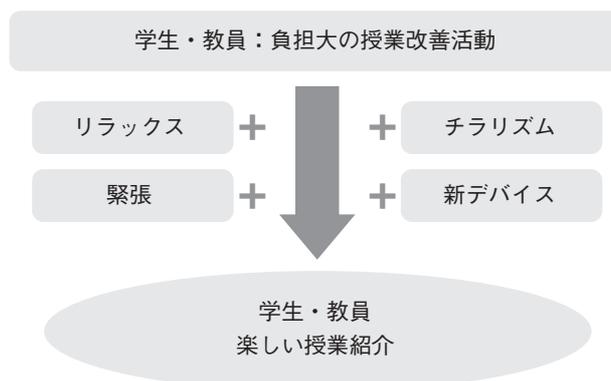
村上 et al. [2005]<sup>8</sup>では、講義自動撮影システムを用いて行っている講義アーカイブ実践において、講義を撮影されることによる講師や受講生への影響、講義アーカイブを理解するために重要な情報、自動的に作成された講義アーカイブの効率性を明らかにすることを目的としている。結果、授業を撮影されることによって当初講師や学生には心理的な負担が若干かかるものの、経験によってその負担は減少していくことがわかった。講義アーカイブを見る際に受講生が重視しているのは、音声情報と教材情報であること、アーカイブ化される授業においては教材への適切な指示が非常に重要であることが示唆された。

授業改善活動をテーマとした研究は日々進化しているが、結局は、大学として学生による授業評価をどんなに大々的に実施したとしても、結果を受け入れる側、すなわち教員の意識改革が行われない限り、授業が改善されることはなく、授業評価というものは形式的なものに止まってしまう。このように、必ずしも積極的とは言えない状況の中で授業評価は実施されているのである（坂本 [2005] p.74）。現在のところ教員・学生ともに授業評価に期待するという姿勢はあまり見られない。学生側も授業評価の形骸化を見抜いており、「何の改善も見られないなら、適当に記入しよう」という現象が起きている（坂本 [2005] p.74）。

4. 本例の目的と方法

4.1 目的

前項の先行研究のレビューで見えてきたことは、授業公開や授業改善活動が学生・教員にとって非常に苦痛で心に重くのしかかり、時間がかかる上に困難な作業となる可能性が高いということである。そのため本稿では「授業改善に楽しく前向きに取り組み、かつ、学生にとっての情報基礎教育の一部としてスキルアップにつながる手法」を実施することを重視した。両者がリラックスして見て、触れて、肩肘を張らない授業紹介の実現を目的



図表1 楽しい授業紹介

とした。

人を惹きつけるポイントは緊張、リラックス、チラリズムの3つである。いつも緊張した仕事ばかりを扱っているとモチベーションは下がっていく。人に何かの行動を変革させたい時、相手が聞きたくなくなるようにする事がポイントとなる。そこで、必要になるのがチラリズムである。全てを見せずに「チラリズム」で、一部だけを見せる。そして相手に「詳しく知りたい」という興味を持たせる。何かを教えよう、何かを伝えたいと思うときにもこの手法が応用される<sup>9</sup>。主張したいメインテーマに関しての詳細を相手にイメージしてもらい余裕が必要であると考え

そのために本稿では図表1に示す「楽しい授業紹介」モデルを想定した。「公開授業という緊張した難題にリラックスを取り入れる」、「公開授業にチラリズムの効果を採用する」にあたる具体策として、教員間では消極的なイメージが強い公開授業に学生の前向きなコメントを用いることとした。また、教員は「私のオススメ授業」として対象の授業を後輩に薦めたいという学生から取材を受けるという形態をとり、教員と学生にリラックスした雰囲気を与えた。さらに、チラリズムの効果を出すために動画を採用し、授業の一部のみを切り出して、効果・音楽を加える編集を行った。情報交換の「新デバイス」として、9画面モニターとiPodを採用した。この新デバイスについて詳しくは後述するが、いずれも本学で新しく利用開始されたデバイスであり、教員と学生に真新しい印象を与え、興味をひくことが予想された。

本例が与えた影響を検討するにあたっては「モチベーション、学生の意識、教員の意識」という3つの視点を重視し、アンケート調査をもとに結果の考察を行う。

4.2 対象者

金沢星稜大学は、経済学部一部、経済学部二部および人間科学部の3学部5学科で構成されている。在籍学生

数は約2,500人、教員数は約60人である。本例を実施したクラスは2007年度1年次の必修科目「情報基礎理論b」であり、受講者数は78人であった。

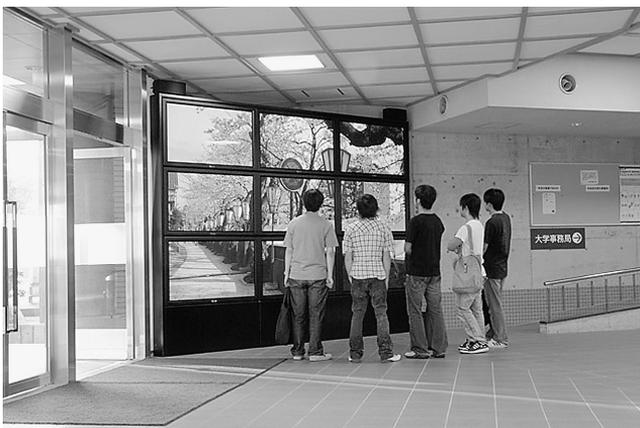
#### 4.3 取材から公開までの流れ

授業紹介を作成するに当たり、学生には自ら携帯電話のカメラを用いて教員や授業風景を取材させ、パワーポイントによるスライドを作成させた。次に、そのスライドに音声をつけて映像・音声コンテンツに編集させた。学生は学内webを通じて公開されるコンテンツを各自が視聴コンテンツとしてダウンロードし、情報共有を体験する。ダウンロード先は本学で平成19年度から全学生に教材として配布しているipod<sup>10</sup>である。その後、本学のエントランスに設置された9画面モニター<sup>11</sup>にて授業風景を撮影した動画を交えて授業紹介コンテンツを放映した。9画面モニターは学内で最も目にとまりやすい箇所に設置されており、コンテンツの公開先として望ましいと考えられる(図表2参照)。

作成された授業紹介コンテンツは27本、9画面モニターによる試験放映を終え、本格的な放映は2007年10月29日から2008年2月4日、各3コンテンツを一週間毎に放映した。9画面モニターでの「私のオススメ授業紹介」放映時間は、午前8時から午前10時であり、当該時間帯に9画面モニター前を通行する学生は、主に1年生と教職科目を受講中の2年生である。9画面モニター前での通行量調査の結果、月曜から金曜日の当該時間帯の通行学生数の平均は136人(男子学生101人、女子学生35人)であった。

#### 4.4 授業紹介作成の流れ

各学生に後輩に受講を薦めたい授業について下記の項目でパワーポイントスライドを作成させた。



図表2 金沢星稜大学1階9画面モニター

- ① 表紙・オススメ授業の科目名
- ② 先生の写真
- ③ 授業の風景写真
- ④ 先生の紹介
- ⑤ 教科書・資料の紹介
- ⑥ 授業の内容
- ⑦ 授業の進め方
- ⑧ 授業の面白い・お勧めポイント
- ⑨ これからこの授業を受ける後輩へのメッセージ

#### 5. 学生への影響とアンケート結果

課題に取り組んだ学生たちにはいくつか興味深い活動がみられた。本例の実践前に、パワーポイントのスライド作成の練習として「自己紹介」作成の課題を実施していたが、この課題においては基本的な技術しか使われていない、指示されたとおりのスライド作品が目立った。しかし、自分の好きな授業や教員を紹介するというコンセプトの「私のオススメ授業紹介」課題を行った所、授業時間内で扱った基本的な技術のほかに学生自らで試行錯誤したと思われる作品が数多く提出された。

例えば、写真を取り込んだスライドに吹き出しをつける、写真に飾り枠をつける、自作のイラストを挿入するなどの、より魅力的に自分の好きな授業や教員を紹介しようとする工夫と努力がみられた。また、授業での教員の姿だけでなく研究室へ訪ねて行って部屋の様子をレポートする内容などオリジナリティあふれる作品が多数提出された。この結果から、本課題に参加した学生のモチベーションは高く、受講中の授業や教員への関心を高めたと考えられる。

また、授業紹介は複数のグループで行う、グループ学習の形態をとっていた。グループ学習という形態では、一般的に仲間と上手くコミュニケーションをとれる学生とそうでない学生とに分かれてしまう場合がある。本例でも、個人での制作はうまくいったが、グループでの話し合いや録音となると主張できない学生が数名みられた。ただし、1年次の必修科目であることを鑑みると初年次教育の一環としてのグループ情報学習の機会を取り入れることは、コミュニケーション能力の向上につながる事が考えられる。公開終了後、コンテンツ作成に参加した学生全員に対して以下の6項目のアンケートを実施した。

- ① いま受講中の授業の中で一番好きな授業科目は何ですか？
- ② その授業を選択した理由は何ですか？
- ③ 一番好きな授業として選択した科目とその他の科目の違いは何ですか？
- ④ 一番好きな授業の先生と個人的に会話したことはあ

りますか？どんな話をしますか？

- ⑤ 一階の9画面モニターで流れている動画を見ましたか？どう思いましたか？
- ⑥ 2年から4年のクラスやゼミのクラスの動画があったら見てみたいですか？

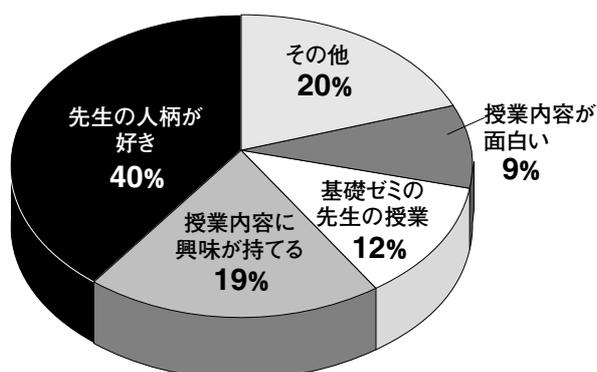
アンケート結果の集計には発想法であるKJ法<sup>12</sup>を用いた。学生アンケート結果を集計した結果、図表3に示す回答が得られた。自分が紹介した授業を選んだ理由としては、「先生の人柄が好き（40%）」「授業内容に興味がある（19%）」「基礎ゼミの先生で親しみがある（12%）」が上位を占めていた。他のクラスとの違いとしては、「クラスの雰囲気がいから（23%）」「少人数制クラスである（19%）」「授業の進め方がいいから（14%）」「先生が好きだから（8%）」「実技・屋外演習だから（8%）」という理由が主要なものであった。

授業紹介の取材から教員との会話が増えたかどうかという質問に対しては「特に変わらない（29%）」「写真をとるときに初めて会話をした（25%）」「前よりも話すようになった（25%）」と答え、9画面モニターに映った授業紹介を見てどう思ったかという質問には、「はずかしい（16%）」「他のクラスが気になる（6%）」「立ち止まってみてしまう（6%）」「見ていない（20%）」今後授業を受けることになる他学年の授業紹介があったら見るかという質問には「見てみたい（50%）」「ゼミの授業紹介を見たい（12%）」「先輩のコメントを見たい（10%）」と答えている。

## 6. 教員アンケート結果

コンテンツ制作にご協力頂いた教員にアンケートを行った。質問項目は以下の通りである。

- ① 自分の授業姿を9画面モニターで見ましたか？
- ② 撮影されることに対する意識
- ③ 自分の番組に対する感想
- ④ 他の先生の番組をみた感想



図表3 紹介した授業を選んだ理由

- ⑤ オススメ授業番組を通じて学生とのコミュニケーションが増えたか

## ⑥ 9画面モニター活用に対する意見

教員からは、「恥ずかしくて自分の番組を見ることができなかった」、「授業全体の構成を前もって確認してから、メインとなる授業内容のときに撮影してほしい」、「通年として授業計画が分かるような撮影方法を考えてほしい」などの意見があり、関心の強さが窺えた。他の教員の番組を見たかという質問に対しては「黒板の書き方や使い方勉強になった番組があった」、「自分もパワーポイントを使った授業に挑戦してみたい」、「手ぶりや身振りで学生に伝えようとしている教員がいて参考にしようと思った」、「公開授業期間に実際に教室に入るには抵抗があるが、9画面モニターで自然と放映されていると気楽に他の教員の授業の様子がうかがえてよい」、「学生から『9画面モニターに映っている先生を見たよ』と言われて恥ずかしかったが嬉しい気持ちもあった」などの意見があった。また、改善提案として、「今回はバックミュージックにサンプル音楽を採用したが、教員の生の音声の方が授業の雰囲気をより伝えることができるのではないか」、「動画に字幕をいれることは可能か」、「学生が授業を紹介するという趣旨のナレーションをいれてはどうか」、「9つの画面があるので動画とスライドショーを分割して放映してはどうか」、等の活発で前向きな意見が多数あった。

これらの意見の内、「パッと見て授業風景だと気付かない」という点に対しては、掲示板で「今週のオススメ授業紹介」として一週間放映する予定の教員の名前と科目名を掲示するようにした。「何が（どの教員のどの授業が）放映されているのかわからなかった」というコメントに対しては、動画にテロップをいれるという工夫を実施した。さらに、「9画面それぞれの画面に動画が流れていたが9画面モニター全体に一つの動画を流した方がインパクトがある」というコメントに対し、9×1面の放映も試みた。

## 7. 考察と今後の課題

本例を実践した結果、学生の積極的な課題参加と授業紹介に対する前向きな評価が得られた。強制されて公開する授業公開制度や互いに緊張が走るような学生アンケートの実施は、学生と教員の溝を深くしているのではないだろうか。学生と教員がコミュニケーションを図る機会を一つでも増やすことが、授業の改善につながると考える。

「自分が授業をする姿は恥ずかしくて、9画面モニターを見ることができなかった」という教員が複数いた。この回答を得られたことが、すでに授業改善の第一歩であ

ると考える。

学生からは、「9画面モニターの動画に自分が映っていて恥ずかしいけど面白くて友達と立ち止まって見た」という感想があった。さらに、ある教員からは学生に「先生の動画を9画面モニターで見たよ」と言われて嬉しかったという感想もあった。これらの感想は、各教員が興味をもって、授業改善の提案を行える雰囲気づくり、また、学生も巻き込んで相互に話ができる関係を作り出し、旧来の授業評価では挙がらない意見を引き出すことができたことを示唆しており、本稿での取り組みの大きな効果だと考えられる。本例が示したように、教員と学生が共にストレスを感じることなく「望ましい授業」に結果

的に近づいていくような授業改善こそが本来求められるべきだと考える。

教員アンケートにて挙がっていた動画の撮影方法とタイミングを再検討することが今後の課題として必要と考えられる。また、当初の目的であった学生の進路選択への影響は現時点では調査不可能であるため、継続的な追跡調査を今後の課題としたい。

## 謝 辞

「私のオススメ授業紹介」にご協力くださった金沢星稜大学の学生諸君、先生方、情報基盤センター各位、本稿作成にあたって多大なアドバイスを頂いた本学の村井万寿夫教授に感謝を申し上げたい。

## 〈注〉

- 1 本稿は金沢星稜大学2008年度共同研究「プラズマモニターの教育活動現場での効率的活用」の一環として実施されたものである。本共同研究は、奥村実樹（経済学部・研究代表者）、高木亮一（経済学部）、寺井嘉治（稲置学園）、二口聡（情報基盤センター）、山崎泉（経済学部）、鶴田明久（パイオニア株式会社コーポレートクリエイティブセンターブランド戦略室・管理グループ）、原澤直希（パイオニア株式会社コーポレートクリエイティブセンター宣伝部・クリエイティブ統括室長）、菊池武史（パイオニア株式会社コーポレートクリエイティブセンター宣伝部・クリエイティブ統括室Web制作グループマネージャー）の8名で実施された。
- 2 南木睦彦・高尾義明「全学的授業参観・公開制度（オープンクラスウィーク制度）とその効果」『京都大学高等教育研究』京都大学、Vol.12、2006年、pp.103-115。
- 3 坂本健成「ファカルティ・ディベロプメントとして効果的に授業改善を行うためのリアルタイム授業評価実施の提案」『流通科学研究』vol.4、2005年、pp.71-82。
- 4 井奥成彦「京都産業大学『授業改善のヒント』作成の経緯と工夫」『京都大学高等教育研究』京都大学、Vol.12、2006年、pp.85-91。
- 5 福田 et al.「大阪樟蔭女子大学における授業改善の可能性と課題」『大阪樟蔭女子大学学芸部論集』vol.43、2006年、pp.179-191。
- 6 林 et al.「大学生の表現・伝達と理論的思考能力の育成を目指した授業設計と評価」『研究論叢』山口大学、vol.52、No.3、pp.271-288。
- 7 鮫島道和 et al.「本学部における「公開授業」の取り組み」『聖隷クリストファー大学看護学部紀要』vol.13、2005年、pp.43-53。
- 8 村上 et al.「京都大学での実践に基づく講義アーカイブの調査分析」『日本教育工学会論文誌』日本教育工学会、Vol.28、2005年、pp.253-262。
- 9 茂木 健一郎『感動する脳』PHP文庫、2007年。
- 10 Apple社の携帯音楽プレーヤーでコンピューターデータの保存にも利用可能である。<http://www.apple.com/jp/itunes/>（2009年5月21日）を参照のこと。
- 11 9画面モニターは株式会社パイオニア製品である。50型のプラズマテレビを9面設置し、8時から21時までスケジュール管理された番組（学校紹介、クラブ紹介、ニュースなど）が放映されている。<http://pioneer.jp/biz/case/kanazawa/index.html>（2009年5月21日）を参照のこと。
- 12 川喜田二郎『発想法』中公新書、1967年。